

第9号

昭和62年11月

# 古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

## 定期講演会(二)案内

演題 「まぼろしの聖徳太子」

日時 十一月二十九日(日)

午後一時～四時三十分

会場 通運会館

電話03-二五三-五二九一

(千代田区外神田三十一十六一

十八、地下鉄銀座線末広町駅

下車)

会費 千二百円(但し会員千円)

法隆寺の釈迦三尊像のモデルは断

じて聖徳太子ではあり得ないことを

後背銘と同時代資料により分析しつ

くした古田氏に対し一元主義史観に

固執し続ける学者・研究者から真の

同調者が現われないのはどうしたこ

とであろうか。歴史学界という巨塔

はドス黒い虚飾の世界でのみ生き続

けるのであろうか。

聖徳太子問題をテーマとした講演

会は今回が二度目である。

が必ず起こるのが古田氏のつらい( ? )ところであり、徹底してお聞き になりたい方は懇談会にも是非参加 いただきたい(会費二千円)

古田先生論文集

「祝詞の誕生」

副題・古代史の実像を追う

出版を東京古田会で企画

今年の大会の発言で会員に対する

会費の還元の声があり、それにたい

し事務局から新たに東京古田会とし

て古田先生の論文の出版を考えてい

る旨の返答を致しました。

その後、具体的な内容について固

まって来ましたので報告し、会員の

御協力をお願いする次第です。

この企画のそもその出発点は事

務局員が古田先生の地方の新聞等に

書かれた論文を読みたくという素朴

な欲求からスタートしたものです。

例えば京都新聞を舞台に展開された

古田・三木論争について、内容は講

演で聞いていますが、本物を読もう

とすると国会図書館にでも行かなければなりません。

こうした不便は事務局員だけでな

く会員にもあるのではと考え、最初

の企画として古田先生が新聞に発表

した論稿のうち単行本に収録されて

いないものを整理し出版する「タイ

トルは「古代史の落穂」-という案

を作成しました。

先生にお見せしたところ、雑誌論

文(学術的なものを除く)をも含め

ること、書き下ろし論文を一編載せ

てはとの意見を頂き、そう出来れば

鬼に金棒と第二次企画案を作成し出

版社等とも接触したところ基本的な

点の話が纏まった次第です。著書の

タイトルは見出しの様に決定し、全

体を四部で構成します。

第一部が書き下ろし論文で祝詞に

ついての新しい分析です。先生のお

話では卑弥呼の同時代の事柄が祝詞

の或る部分に出ているという魅力的

なテーマです。

卑弥呼とその時代の痕跡は、近畿

天皇家の歴史書の中で消されている

九州王朝とともに一中にあって、

先に風土記の記述中から卑弥呼と類

推できる瓊依姫を析出した先生が祝

詞のなから、如何なる同時代の痕

跡を見出したのか、一日も早い脱稿

を期待しています。

第二部は、最初に触れた古田・三

木論争を中心に中国史書の示す日本

古代史の実像に迫った論稿を集めた

ものです。

古田先生以前の学者が三国志魏志

倭人伝を読む際、原文改定の弊を如

何に侵してきたことか。その資料全

体の文字・熟語の用法によって、当

該部分の読みを決定する-この客観

的な資料の取り扱いの方法の持つ魅

力と威力が一番発揮されているとこ

ろです。

なお、三木氏の論文は、古田先生が

要約されて、理解の便をはかります。

第三部は、遺物の語る古代史の実

像をテーマとしました。

幻の雑誌として古田会メンバーも

入手難であったリベルタン及びリベ

ルタン通信に掲載された「古代史講

語」を中心に土器、鏡、銅鐸、金印

に触れた論稿を集めました。

古田先生のお話を見詰め、見抜き力

は、三部作の中にも片鱗が表われて

いました。ここに古代王朝あり

き」での沖ノ島の金銅製電頭一対への観察を始めとする鋭く遺物へ迫った結果が、考古学会への根本の問い掛けになったと思われまます。考古学者のうち誰一人答えられずに居ますか。

最後のテーマは、神話の秘める古代史の実像で、戦後史学が否定した日本神話の中に歴史の真実を見る。勿論、皇国史観の復活ではなく近畿天皇家もワンオペ日本列島の王者と見る科学的見地に立って「もの」を取り上げました。

中外日報に連載された「九州王朝と日本神話」を中心とし降臨神話や出雲神話を現地に足を伸ばしてそのリアルな物語性とそこに秘められていた実像を説き明かしていく先生の筆法に今更ながら感激です。なお、編集状況に東京古田会の前史と活動状況などを載せたいと思っ

ています。会員には大幅割引。出版時期は来年五月大会前を予定してきます。価格は未定ですが入手しやすい金額にする予定です。東京古田会の会員には会費還元の見地から特別価格を設定したいと考えていますのでご期待ください。

(新泉社から出版します) (事務局) 卑彌呼の鬼道と中国の二つの道教

大田区 青葉 実

魏志倭人伝で「女子を共立して王と為し、名は卑彌呼と曰ふ、鬼道に事へ能く衆を惑す」とあるが、この鬼道は何であるか。同じく魏志巻八張魯伝で「魯は漢中に據り鬼道を以て民を教へ自ら師君と號す」とある。著者の陳寿は鬼道を同一内容で用い

ている。

当時、中国には二つの道教があった。張魯の道教は祖父張道陵が蜀で老荘の道家の思想を基に、治療の呪術を説き平癒した者には五斗の米を出させたので五斗米道といわれ、急速に信者を増加し、192年に孫の張魯は符水を用いて鬼道と称し信者は鬼民と呼ばれ、自らを天師と称し、その宗教を天師道と号した。急増した信者を率いて張魯は漢中平野に至り大守を攻め滅し、之を支配したが後漢の將軍曹操は之を征するこ

とが出来ず妥協して魯を大守とし漢寧王に任じた。ここに道教国家が成立し宗教・軍事・政治の三権を握りその勢は江南に及んだ。呉を江南に孫權が建国するや招かれて江南へ移り、孫權の援助を受け江南道教は隆盛した。

一方山東半島瑯琊で124年太平道として道教が発生したが、之はBC380年代の齊の老子・莊子等の道家の思想を基に神の存在を主張し、古代からの齊の巫術を加え、秦の始皇帝や漢の武帝の信仰した神仙思想をとり入れ、庶民に符水の飲用などによる病氣治療や長生を説いた。後漢の民衆に急速に拡がり、184年に指導者張角は36万の兵を率いて黄巾の乱を起し後漢を揺がせたが曹操等の討伐軍に敗れ敗残軍は山東半島に逃げた。

更に一部は黄海を渡り後漢の楽浪郡の支配の届かない馬韓南部の錦江流域に至り、数年後その一部は朝鮮海峡を渡り北九州の伊都国に渡った。当時の倭国は前漢以来の海人族国の伊都国と新興農業国として二万の人口をもつ奴国が室見川を境として対

立し夫々の分岐国や第三勢力国をまきこみ大乱で王を立てられない状態であったので新興宗教の女子を共立して女王とし伊都国は自国の山地を割いて邪馬台国とし女王の都する所とし主導権を握った。つまり卑彌呼の鬼道は黄巾の乱の道教である。

陳寿は西晉に仕え張華の引立により昇進したが兩人は儒教の学者であり、魏の文帝や西晉の皇帝は儒教を重んじ神を否定し道教を拒否して弾圧している。しかし魏の明帝は在位13年で父と異なり道教を信仰した。

魏志巻三明帝には青竜三年235年農民の妻が天神が下り登女(仙女)になったと称し治療に効果を上げた者を迎えて、後宮に館を立て優寵したが、238年明帝の病氣のとき験がなかったので殺されたと記している。

道教の卑彌呼は235年の明帝の信仰を知って238年朝貢したのであり、魏も優遇し、銅鏡百枚も道教弾圧して来た魏朝には道教の鏡の神獸鏡はないので、後漢式鏡で神仙思想を現す方格規矩四神鏡を鬼道の倭国にふさわしいと選定して賜ったのである。

一方、江南の呉は238年の建国以来道教を崇敬し、孫權は自らも信仰し葛玄を重用し城隍神を祀った。天師道の張魯の子孫は招かれ江南に移り、古代からあった呉越の巫をとり入れ、江南道教は大発展した。神獸鏡や大型鏡は江南のみで作られたのは道教の靈器としてである。我國の三角縁神獸鏡の源流は江南で、呉の工人が渡来して作ったもので、陳氏作鏡の銘は銅鏡の工人でなく、道教の天師の名であり神即ち鏡の信仰から工人の名を銘することはあり得ない。三

国志呉志巻48に呉の滅亡時に大船にのった水軍二万が逃亡したとあるが、江南道教指導者や工人等を載せ、西晉の海域をさけ東海を東へ直進して九州島の中央の有明海に到着したであろう。

280年の江南道教の渡来により壹與の鬼道は之に服属し、女王国連合は解体し、北九州・瀬戸内の各地の主要海人族の首長や奴国などは江南道教の指導者と統合して各地に道教国家と三角縁鏡・鉄刀、前方後円墳が突如出現し、弥生末期の青銅器祭器による地祇信仰は急絶し倭国は大変動した。(以上)

豊島区 香川 正

津田左右吉が『日本古典の研究』の中で、神武天皇東遷の物語について次のように述べている。  
「さういふ未開地、物資の供給も不十分で文化の発達もひどく遅れていた僻陬(へきそう)の地、いわゆるソシシの空国(むなく)が、どうして皇室の発祥地であり得たか」

たしかに、その指摘はうなずける。美々津の海岸べりには、「神武天皇御舟出乃地」なる標識が建ち、いかにも神話の国らしいのどかな光景を醸し出している。日向国宮崎県は「神話と伝説」を売り物にする観光県にすぎないのであろうか。鶴戸神宮にしろ西都原古墳群にしろ、様々な伝承地を訪れてはみたが、そのどこにも神武天皇の皇都としての痕跡を発見することはできなかった。だが、そこから導かれた津田の見解——東遷は歴史的事実ではない。

ヤマトの朝廷は初からヤマトに存在した」という結論は、そのままに受け入れていいものであろうか。

神武東征伝承に関して、一つの素朴な疑問がある。神武らは航路をはずれてまで、なぜ筑紫(岡田宮)へ寄留したのか。豊国の宇沙や阿岐国の多那理宮また吉備の高嶋宮に立ち寄るのは、東征の航路の途上であり、兵員や物資の補給基地として素直に理解できよう。

日向に都(拠点)があつて当初から東征が第一の目標であつたならば、関門海峡を越えてまで筑紫の岡田宮へ「日本書紀」にいう岡水門(をかのみなと)へ立ち寄る理由はどこにあつたのか。そこが父祖に関連した土地だったからか。戦勝祈願のために武運長久の御利益が高い神様に詣りたためか。あるいは支援部隊の要請に向いたのか。いずれにしても何か説得力に欠けているように思われる。

邦光史郎は「古事記を歩く」の中でこの神武東征伝承に触れ、さすがは推理小説出身というか、鋭い嗅覚を發揮してこう指摘している。「この日向が宮崎県の日向なら、東へ行くこうというのに、どうして北西に当る筑紫(福岡)へわざわざ行ったのか」と。ただ彼は先を急いでいたためか、「どうもこの筑紫は北九州というぐらゐの意味で使っている」のだらうとぼやかして、追求の手を省いてしまつてゐる。いま一步のつっ込みがあれば、と悔まれる。

「筑紫朝廷」というか「九州王朝」

中国史書に現われる倭国IIの存在を想定した時に、はじめてこの問題は解決の糸口が見えてくるように思える。すなわち東征II銅鐸王國への侵入IIに関する指揮・命令の主体は、神武らの出身地であつたのだ。日向は右吉が喝破したように、「天皇の都」の所在地としての条件は備えていなかった。

神武の兄「五瀬ノ命」はさだめし日向軍団とでも言おうか、一部隊のリーダーに過ぎなかつたのではないだろうか。さもなければ、わざわざ航路をはずれてまで筑紫へ立ち寄る道理がないではないか。

筑紫(岡田宮)なる「東征軍の統率者」の召集を受けて、五瀬(イツセ)たちが参集したというのが事の真相ではなからうか。以上が私の歴史紀行「神武東征は実在したか——記紀の神話を検証する」(拙著「神話の原風景」所収)を通じて得た帰結である。

中国・華中古代史の旅

横浜市 長谷川辰雄

暑い真夏の日本をさけるなら、涼しいカナダへと思う心と裏腹に、華中の古代史の旅へ。最近開放された河姆渡遺跡の見学。この遺跡から日本の各地で出土する玦状耳飾りと同型の物が発掘され、伝播の方向性について、中国と日本の多くの学者は中国→日本と決めつけているが古田先生の異った立場はどのようなのか。倭人の足跡が発見出来るか期待に心をはずませ中国民航の機中の人となる。

中国大陸へは今回で四度目、九州

古代王朝への真実の学究洞察に魅せられた私であるが故に。夕刻、上海空港に無事着陸、ホテルへ直行。翌早朝、未だ夜もあけぬ暗い上海の駅に、紹興へと旅は忙しく、約八時間の汽車の旅が続く。車窓の眺めは、日本の古里を想い出させる田園風景である。水稲の源産地の感がある。されど、かつて吾が同胞が如何がわしい戦の犠牲となつた所かと、さぞかし苦しい毎日であつたらうと憶はせる。感泣抑えがたし。



河姆渡遺跡の地層を指す所員

紹興郊外の河姆渡遺跡文物管理所に着く。予定では、出土品を終日見学とあるが、管理所員曰く、「此処には何にも無い」との事。古田先生は、通訳を通じ幾度も問い詰めるが「無い」。出土品は総て浙江省博物館に有る」との返事ばかり。残念だ。せめて遺物の出た場所でもと管理所員の案内で現地へ向う。中国は広い、近いと云うが一時間半以上かかった。熱いバスの旅はつらい。所員の話では、二〇〇〇年を迎える記念事業として河姆渡遺跡の出土品を

すべて展示すべく、大規模な博物館が建つとの事。着いた所は、蓮田と水田の中。遺跡現地を見んとバスを降りて向うと、おりからスコールにあう。全員ピツショリ。地層は四段でめざす「玦状耳飾りはここ」と所員指して教えてくれる。心は早や、浙江省博物館へと急いでいる。翌日、浙江省の省都杭州へ。マルコ・ポーロが「世界で最も豪華で富み栄えた都」と讃えた杭州を指す。浙江省博物館は西湖の辺りにあつた。中国有数の景勝地西湖は二千年以上の歴史ありと聞く。隋・唐代に栄えた杭州。湖は周囲十五km、面積五・六km<sup>2</sup>とある。越王勾践が呉王夫差に敗れた後に夫差を惑わす為に贈つた美女西施の名に因んだものと。湖中には唐代詩人白居易が造つた白堤、蘇東坡が造つた蘇堤が伸び、孤山、湖心亭、三潭印月等の島々がある美しい湖である。遊覧船に乗りしばしロマンの人となる。西湖の畔りに豪邸有り四・五十万円にて買いとれると聞く、チョッピリほしくなる。さて出土品が待っている博物館へ急ごう。未公開文物が多量にあるが中国の学者が現在研究中のことと極めて嚴重で写真等はいっさい駄目で、目で見るだけ、残念だ。目指す玦状耳飾りあり博物館の一角に、珠、石、魚骨、歯等にて二・三十個あり、人の歯にて作りしものありと聞き、見ているが解らず。大きからして鹿の白歯に見える、人の歯にあらず。この耳飾りの伝播の方向性を、古田先生は「倭国より中国へ」との説明をなされた。倭人のすぐれた生き方と心をあたたまる想い

であった。

東晋の遺跡は南京郊外の田園の中に有り、今は数少ないカラジシの大石像が淋しそうに向って吼えるのか、ものかなしい。つわもの共の夢のあと、紹興酒をおもいきりあおる。いつの時代も平和であってくれと!!

書道界にも古田説の紹介  
——日本の書の始源をめぐる  
旧聞であるが、書道界に古田説が取上げられ、検討されているので紹介しよう。

「書道美術」という雑誌に「日本の書の始源を探る」と題された記事がそれで、飯島太久磨氏が空想座談会の形式をもって四回の連載(昭和六〇年五月〜八月号)をしたものである。

全体として、考古物の文字資料を取上げているのであるが、その背景としての古代日本の理解にも古田説の影響があるのかなと感じる部分がある。それは別にして、直接取上げているのが「室見川の銘文」問題である。「ここに古代王朝ありき」の古田論述を取上げ紹介するとともに、次のような批判点を出している。

①「延光四年」と「五」の字体を古田氏は漢字(隸書)と篆体に分けているが、「五」の字体は隸書に例(五鳳二年刻石)があり、「延光四年」と同じ書体と見るべきである。

②全体の文字を推拙と見る古田説に対し、装飾性の強い文字として見る必要がある。

③中国の書道資料に「延光残碑」があり、延光四年作で、その書体を龍字にすると銘版の字に似ていて、中国製作説も捨て難い。

④賜と賜は別字であり、銘版文字は前者である。両者は意味が違い、古田氏は後者で解釈している。銘版の同字のツクリは左文字であり、誤字誤刻とすれば倭人製作を裏付けける以上結論は出さず、新たな文字資料の紹介をしなから問題に供する態度である。

そのほか、稲荷山鉄剣の文字も取上げているが、大野説のままである。ただ他の鉄剣文字との書風比較しているのが興味深い。(事務局)

朝聞神社絵馬の保存の寄付について  
「東京古田会ニュース第8号」で絵馬保存にご協力をお願いいたしましたところ、10月20日までに左記の方々からご寄付をいただきました。ご協力どうもありがとうございました。

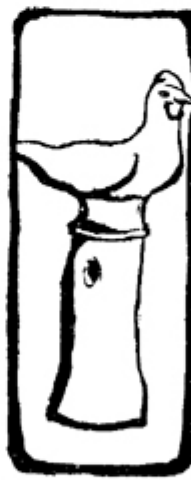
- 山本真之助、山本にわ、毛利一郎、牧野稔、竹内敬二郎、望月淑子、黒田純子、藤野智恵、根本太郎、田村亀雄、鈴木正勝、小田昭雄、藤沢徹、高橋努、松浦文一郎、江森巳之助、渡辺鶴代、橋本崇、山口秀郎、藤吉美智子、藤田誠三郎、滝博、長谷川辰雄、新庄智恵子、庄司光郎、佐藤彰一、山野貞子、樋口二利、関野忠義、蔵坪英雄、古宇田亮一、富岡剛二、春田孝正、関谷博、吉田堯躬、戸次洋一、岡田君子、峯岸幹郎、堀一夫、上野学、小田芳夫、加藤慶元、今村定雄、平間二夫、唐沢孝樹、三原隆、鈴木恒明、香川正、栗原装哉、中田道子、畑耕平、小池文夫、黒田正、立川玄一郎、田川澄子、舟根智美、滝民雄、中島洋、高橋悦子、中津川督章、西川桂治、田島芳郎、日下滋子、川上英一、北川真佐美、福

田健、青山富士夫、松崎敏夫、田中房子、竹野恵三、篠崎俊、長沼達郎。(敬称略、到着順)

古田先生の予定

事務局

- ◎11月8日 東大史学会で発表。テーマは「法華義疏の史料批判」
- ◎12月4日 出雲、ハワイの日米合同薬学大会「環境汚染2分会」出席
- ◎テーマは「出雲の古代公害病」



古田先生の最新案内

「よみがえる卑弥呼」

——日本国はいつ始まったか——

駁々堂出版 定価二、〇〇〇円  
二年間の沈黙の中、次々と想起する戦後古代史学への根源的な疑問を大胆に提示し、真実の日本古代史像を築き上げる。古田古代史学の最新成果。国造制の史料批判——出雲国土記における「国造と朝廷」。卑弥呼の比定——「饗依姫」説の新展開。等十編を収録。

「倭人伝を徹底して読む」

大阪書籍 定価一、六〇〇円

この本は、魏志倭人伝の中の一語一語について、「三国志」をはじめ中国のあらゆる古典との史料対比から解析し、これまでの研究の諸成果をふまえて倭人伝の全内容を検討し直したもので、いつもながらの明解

で緻密な論理構成のもとに大胆な仮説を設定し、その論証過程をおしにして、古代日本の真実の姿を浮き彫りにしています。古代史の初心者にもできるだけわかりやすく解説されていますが、また他方研究者にとっても見過ごすことのできない新知見も多数盛り込まれており、いわば、三邪馬台国はなかった、以来十六年、古田古代史学精華」ともいふべき内容を備えています。

シンポジウム

邪馬台国から九州王朝へ

新泉社 定価一、七〇〇円

今年三月二一、二二日の両日、福岡市において、九州王朝文化研究会主催、福岡市教育委員会ほか後援による「邪馬台国かが九州王朝へ」というシンポジウムが開かれた。この本は、古田氏の講演を初め、全講師の講演を進行通し集録したものである。※講演会場で販売を予定しています。

古田先生と行く古代史の旅

◎高志の国の古代史

期日 11月21日(出)〜23日(祝)

旅行代金 八九、〇〇〇円

行程①上野⇨長岡市(馬高縄文遺跡、火焔式土器)⇨越後一の宮、弥彦神社⇨五世紀中期の前方後円墳として我が国最北端の葦浦塚古墳 ②佐渡・玉造り遺跡⇨国分寺跡⇨小木民俗博物館(長者が平遺跡出土品)⇨佐渡一の宮、渡津神社 ③宗太夫坑⇨無宿人墓⇨佐渡博物館(千種、玉造り遺跡出土品)⇨④種弥生末期遺跡⇨熱串神社⇨新潟⇨上野お申し込みは朝日トラベルへ。(03-1542-1745)